

ものと見る新たな見解が成立つて來るのである。

次に羅漢堂・馬家窯・朱家寨出土土器の近似が、果してその何れを先とし何れを後にすべきかは馬家窯遺跡の詳報を待つて考うべきであると報告者は慎重の態度をとつてゐる。

併し現在の資料を以てして果して不可能な事であろうか。こゝに又今後の問題の一つがあるわけである。更に此等の遺跡に見る彩陶と河南仰韶村・秦王寨或は山西西陰村との近似からする甘肅河南兩地域の彩陶群を横に繋ぐ聯繫如何は興味深いものがあるのであつて、それが如何様につながるかという所に大きな問題の一つがある事を此書を読んで又思い及ぶのである。

最後に報告者は土器片のあるもの(挿圖十(一))を以てオールドス青銅器との類似を考え、又羅漢堂出土の石刃を嵌入せる骨鎌をもつて金屬器に祖型を發するものと看做して、オールドスナイフをそれに當ててゐるが、如何であらうか。例えば後者にしてもオールドスナイフがシペリヤ・蒙古の草原地帯に古くから而も長く行われた事は是認されること乍ら、

石刃嵌入の鎌の類に至つてはエチプト・メソポタミア等の古代東方文明世界により古くから使用されてゐるものである事が此の場合顧みらるべきではなからうか。

以上本報告に依つて從來説かれて來た齊家期を最古とする誤つた甘肅六期説が發掘者の側から修正せられた事が明かになり、又その記述を通じて從來やゝ關連の薄弱であつた甘

肅・河南の兩者の史前文化の横の關係を考へる上に豊富な資料を提供した點で注目せらるべきで、中國先史時代今後の研究の新展開に一つの基礎をなす重要な文献たることは何人にも首肯されるであらう。

—— 鈞 田 正 哉 ——

J. G. Andersson: The Site of Chin Chia Chai (朱家寨).

Hsi Ning Hsien (西寧縣), Kansu (甘肅).

(The Museum of the Far Eastern Antiquities, Stockholm, Bulletin No. 17)

本書はアンダーソン博士が一九二三年十月に發掘した朱家寨遺跡の正式な報告書である。この遺跡については、既に「甘肅考古記」「黃土地帯」に於て言及されて居り、又住居地出土の彩陶片については本紀要の第十卷(一九四三年刊)でやゝ詳しく述べられて居る。従つて本書の主とする所は墓址とその出土品、彩陶を除く住居地出土品である。この遺蹟は、所謂甘肅仰韶期中の最も重要

なものとして、長い間その資料の發表が待たれたものであつた。即ち此處に於ては、約五十基にも達する史前墓が組織的に發掘され、又、墓址と住居址とが共に發見されてゐることが報ぜられた。所が甘肅仰韶期のその他の遺蹟に於ては、組織的に發掘せられた墓は、半山の邊家溝大墓たゞ一基であり、又アンダーソン博士は半山墓地と馬家寨住居址とが同一の住民によつて營まれたものと論斷して

居られるが、これは必ずしも充分な證據を有して居ない様に感ぜられるが偽である。併しこのような二つの大きな興味は、本書に於てはやはり充分に満たされるに至らなかつた。

即ち、墓地はすべて掘亂されて居り、住居址の方も組織的發掘が行われなかつたのに因るところがある。墓地が掘亂されていたのは、博士によれば地震の結果であらうとされて居る。後の人為的な掘亂としては、すべての墓が一樣に亂されていることは不可解であり、埋葬の習慣によるとすれば、副葬の土器の破片迄がかなり離れた地點に移動していることも説明がつかない。されば右の地震による地すべりの結果とするのが最も妥當な見解であらう。又住居址が發掘せられなかつたのは、その最良の部分が現在の人家の下になつていふことゝ、墓地の發見によつて、その方により多くの興味を持たれたからであつた。従つて、所收の住居址出土品は、主として先發せる博士の從者が、博士の到着以前に採集したものである。以上の如き缺陷はあるが、本遺蹟はなほ甚だ興味に富むものである。現在、本書の入手が可なり困難と思われるところから、簡單にはあるが、以下に墓址の内容を紹介することにする。

遺蹟の位置は甘肅省の西寧より西寧河を遡ること十七軒の北岸、同河にそゞぐ一支流の西、小高い丘陵の麓のゆるやかな斜面上にあつて貴徳地方や洮河流域の遺蹟の如く馬蘭台地上にない遺蹟は北方が狭がつた三角形をなし、南北の長さ八百五十米、幅の最も廣いところは四百七十米で、面積は約二十萬平方米を算し、北部に住居址の最良の部分があり、墓址の發掘せられた部分は東西十五米南北十米足らずで、その中に四十七基の墓があつた。他の中國先史墓と同様に、殆ど何等の遺構もなく、たゞ墳穴を掘つて、中に遺骸と土器その他の副葬品を入れ、再び土を覆つた式であり、深さは現在の地表下、約一米より三米の間で、二米内外のものが多い。前述の掘亂によつて、遺骸の方向や姿勢は多く明瞭を缺くが、二三仰臥伸展葬と思われるもの（第十二號墓・第三十二號墓・第四十六號墓等）や、同じく伸展葬であるが、伏臥せるもの（第四號墓）、右を下にすると思われるもの（第三十三號墓）がある。屈葬の有無は不明である。

副葬品はすべてその原位置を確め得ない。出土の彩陶は半山墓址出土のものより稍々時代の下るものであつて、博士の所謂後期仰臥期に屬する。器腹又は口縁部に二ヶ或は一ヶの縦の把手を有する壺が殆んど大部分を占め、文様は中心部の大きな連渦文、及び菱型文を主とし、半山墓址出土品に直接續くものである。それに所謂 *dash pattern* が用いられていることは云う迄もない。文様上注意すべき點は、連渦文がやゝ變形となり、中心が三ヶのものや、巻き方が反對になつたもの存すること、半山墓址出土のものには見られぬ便化し單純化したもの、又、明らかに馬廐期と思われるものゝ存することなどである。半山墓址出土のものには殆ど使用されて

いないスリツプが間々使用されていることも注目に値する。形態に於て問題となるのは、文様はこの期の特徴あるものがありながら、口縁部が鞍型をなすものゝ存することであつて、これは今迄全く類の無いものであり、辛店期・寺窪期の鞍型の口縁部との關係如何が大きな興味をそゝるのである。彩陶以外では

形態や胎土は彩陶と同様でありながら彩文を全く有せぬもの、邊家溝大墓出土のものと同系統の突帯ある粗陶、及び、繩蓆文を有する粗陶がある。石器は石斧數ヶで取り立て、言う程のものなく、骨角器としては、骨針少數と燧石の刃を嵌込んだナイフ一ヶが出土している。このナイフはほぼ完形を止めた貴重なものであつて、他に破片數ヶが住居址から出土し、この型のナイフが可成り用いられたことを示している。裝身具としてはトルコ石・アマゾン石の垂飾數ヶ（その内少數は既に本紀要第十五卷々頭に原色版で示されている）、特に興味を引くものとして子安貝を摸した骨製品がある。大理石製の小玉は非常に愛用されたらしく、何百と云う數に上つて居り、中にトルコ石や骨の小玉も少數混じている。披針型の骨板や短冊形の小骨板は、恐らく最も重要なものであろうが、既に「黃土地帯」に於て博士自身が紹介して居られることではあり、その後別に新しい見解も示して居られぬ故、こゝでは省略する。たゞ小骨板は豫想以上に多數で、第六號墓の如きは百ヶ以上を算していることだけを擧げて置く。

次に住居址出土の彩陶以外の土器では、墓址出土のものと同じく、彩陶と同様でたゞ彩文のみを缺くもの、突帯文ある粗陶、繩蓆文ある粗陶を主とし、その他に底部や把手の形などより相當時代の下ると思われるものや、齊家期の土器片二ヶ、更には高の足と考えられるもの迄存在するが、組織的發掘がなされて居ない以上、それら相互の關係を云々することは出来ない。博士は齊家期の破片の存在を以て、自己の編年に都合のよい解釋を下して居られるが、これは殆ど根據の無いもの云うの外ない。彩陶については、既に本紀要第十五卷に述べられているが、これによると半山墓址系の death pattern を有するものと、博士が住居址土器とせられる馬家密系の、博士が住居址土器とせられる馬家密系の黒線文の土器とが混じて居り、兩者を同一時期とせられる博士の立論に好都合であり、又墓址出土のものには馬家密系のものは一ヶもない。しかし、それにしても羅漢堂や南甘肅に於ける諸遺跡に於ては、黒線文土器のみで半山墓址系の death pattern を有する土器が一片も出土して居らず、これらの遺跡の住民は death pattern を有する葬用土器を

用いなかつと考えなければならぬ。こゝで羅漢堂出土の黒線文土器と、馬家密、朱家渠出土の黒線文土器との同時代性を觀るならば、半山系の土器と馬家密系の土器とが、同時代であつて、單なる用途の相違であると云い切るにはまだ程遠いのであるまいか。この問題は、住居址と墓址とが近接して發見されたこの朱家渠遺跡に於て説明せられることを期得して居たのであるが、住居址の組織的發掘が行われなかつたために、遂に實現せられなかつた。その他の住居址出土品としては、羅漢堂遺跡の特色をなす側面に刻み目の入つた石庖丁が此處に於ても出土していること、骨製の鋤と考えられる珍らしい遺物が相當數出土していることが目立つた點である。いずれにしても、この錯雜した墓址の發掘品を、遂にこゝ迄整理せられて發表され、中國の先史時代の解明に重要な資料を提供せられた博士の努力に對して吾々は深い敬意を拂はねばならない。

——藤澤長治——